徳川・五島本源氏物語絵巻の「帳」と「人物」

――柏木（一）の秘密を覗く女房たち――

鈴木夏衣

はじめに

「源氏物語絵巻」には、実に様々な女房たちが描かれている。絵巻自体は長い年月と共に色褪せてしまっていても、彼女たちの存在は華やかで生き生きとし、常に鑑賞者の目を楽しませる存在である。

女房とは勿論、貴族の家や宮中に居住し仕える侍女のことである。彼女たちはその家に住む貴族の身の回りの世話をし、生活していた。「源氏物語絵巻」に描かれている女房たちの多くは、主人公や女君の側近くで働く、いわゆる上臈女房、または中臈女房など、比較的身分の高い女房が主であり、乳母や乳母子またはその関係者、血縁者で固められている。平安時代において血縁関係は強力であり、婚姻も、一見そうは見えないが光源氏の恋愛でさえ、一定の血縁内で行われていた。

そうした様々な縁や筋で集められた女房たちには、家族に近い位置にいる乳母や乳母子、またはよほどの上臈女房ではない限り、「働いて生活をしていく」という生きる上での明確な目的がある。その中には仕事と家庭を両立させていた女房たちも多くいただろう。仕事をするということは、内外共に、外へ出て行くということでもある。家にいて、鬱々と男性を待つだけの女君とはまったく別な姿勢がそこにあったに違いない。

女房は、恋や人生に悩む主人公や女君、または常に主人の側にいて秘密を共有し、見守る立場にいる乳母や乳母子とは別の次元に生きる存在である。そのような女房の姿は、源氏物語の登場人物たちと同じ絵の中に収められても、その異質さは払拭できない。「覗き見」をする女房たちは、楽しげな、あるいは秘密とは無縁な雰囲気を漂わせているかに見え、それゆえに様々に思い悩む主人公たちと

は正反対の位置にいるように見えるのである。

そのように女房たちが無邪気な雰囲気を纏っていられるのは、彼女たちが物語内の展開において、重要な役割を負わなくてもよいからである。そして、そうした背景の上にいるからこそ成り立つ行動が、「覗き見」（「立ち聞き」）なのである。しかし、物語上において、何も責任を負わずに済んだはずの女房たちは、「覗き見」をする姿を描かれたばかりに、絵巻上において重要な役割を負うことになる。

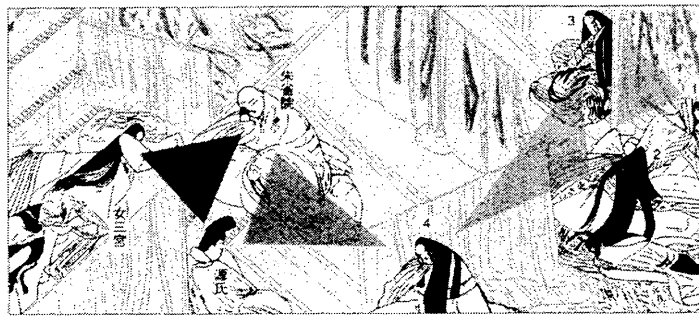
また、「源氏物語絵巻」で女君と女房が描かれている絵は、柏木（一）、横笛、鈴虫（一）、夕霧、竹河（二）、橋姫、早蕨、宿木（二）、東屋（一）、東屋（二）の十点で、現存する絵巻の十九枚の内五割がたを占める。女房は女君の側にいるべき存在であるから別段おかしくはない数字ながら、男女の恋愛物語である源氏物語の絵巻として見てみると、その数はやや多いのではないかとも思える数字である。主人公とその恋人という枠組みの外にいるべき他人が多く描かれているということになる。

後にも触れることだが、「源氏物語絵巻」を描いた絵師たちは様々に工夫して、極めて綿密に構図を決め、物語の核心を鋭く表現して描いている。そのような絵師らの技術力、あるいは構成力を考慮すると、絵巻の半分を占める存在として描かれた女房たちには、絵師たちによる何らかの意図が含まれていると考えられる。本稿では、そうした女房たちに与えられた、絵巻上での役割は何であるか考えたい。

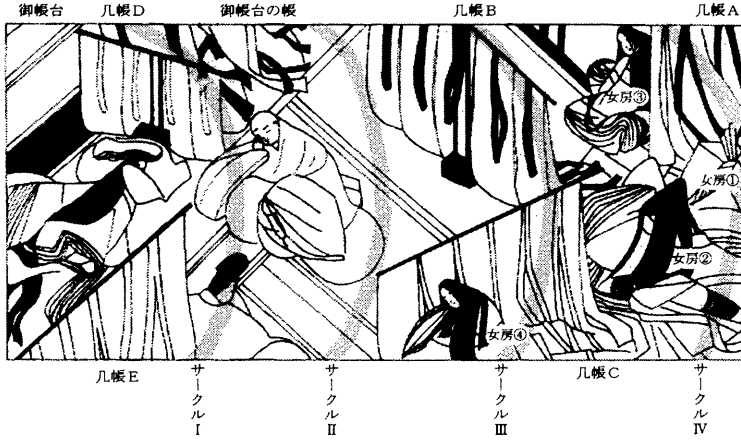
一　柏木（一）の構図解析

柏木（一）は、四人の女房が右端から描かれていき、朱雀院、光源氏と続き、奥に女三宮がいるという構図になっている。佐野みどり[1]はこれらの人物は「悲しみの三角形を構成している」と指摘し、右から左へと見る絵巻の見方と、それに伴う読者の視点を利用した繰り返しの手法であるとしている。三角形の人物配置に加えて目に留まるのが、まるでその悲しみの流れを遮断、あるいは密閉するかのように置かれた、几帳等の調度品である。几帳は全部で五つ描かれており、図に合わせて、几帳に右から順にアルファベットをふると、前述した佐野氏の三角構成図とは別に、サークルで分けられた構図を見ることができるだろう。なお、サークルに番号をふる際、几帳にアルファベットをふったように本来ならば絵巻の見方に沿って、右から番号をふるべきであるが、説明の必要上、左からサークル番号をふる。また、説明を明快に述べるために、左から右の流れでサークル構成図を説明することを予め述べておく。

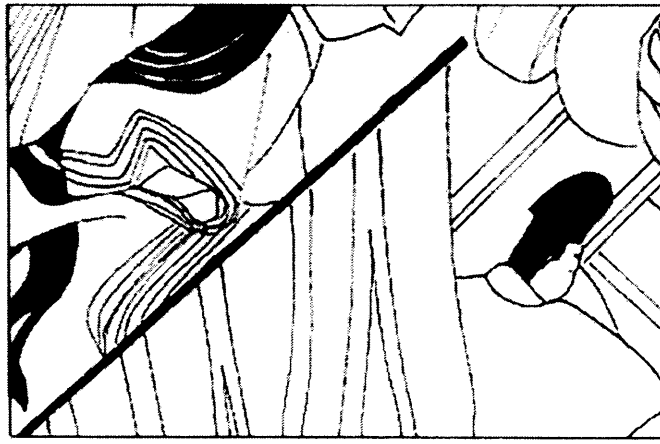
サークルIには、密通の事実を知る（女三宮の出家の真意を知る）二人と、女三宮の御帳台、またそれを覆い隠す几帳Eが描かれてい



佐野みどりの柏木（一）三角構成図 (2)



サークル図 (3)



几帳Eと源氏 (5)

て、色調も御帳台の浜床と女三宮の髪の色である黒を中心に重苦しく描かれている。御帳台は、三田村雅子[4]が示唆する通り、「女三宮が光源氏と共にしてきた夜を示すものであり、同時に柏木との密通の舞台でもある」もので、女三宮の罪の象徴とも言えるものである。それに背を向ける形で女三宮が顔を覆っているので、これから切られる彼女の黒髪が、一層目立つように描かれている。

その女三宮の前には、密通の舞台とその本人から顔を背けた源氏がいる。彼の脇にある几帳Eは前述した通り、御帳台と女三宮を覆い隠すように置かれている。これは源氏の、心情の有り様を象徴しているのではないだろうか。源氏は自分を裏切った女三宮を許せず、出家も強く止めはしない。それは言い換えれば、密通をし、なおかつ不義の子を出産してしまった女三宮が出家するならば、この一連の事件は俗世間、つまりは人の耳には届かないだろうという考えなのである。その気持ちを如実に語っているのが几帳Eなのである。

また各サークルの分け目ともなる几帳の「帳」にも注目したい。几帳は各サークルにいる重要人物と付随する位置に描かれていることから、その人物の心情を、「帳」を乱すことによって、またはその乱れ方によって表しているのではないかと思われるからである。源氏の後ろにある几帳Eの「帳」はその全貌を描かれてはいないものの、源氏のいる場所に近い「帳」は大きく歪んでいるのが分かる。先述したが源氏は女三宮の出家を全面的に反対してはいない。しかし、描かれている源氏を見てみると、女三宮の出家の発言に驚き、身を乗り出しているのである。源氏は出家に肯定とも否定ともとれない、実に曖昧な態度なのである。源氏が身を乗り出した、その際の瞬間的な動きが「帳」にも伝わっているのだとしても、「帳」の乱れではなく、歪みを描くことで、源氏の女三宮に対する気持ちが複雑に歪んだものであるということをはっきりと描き示しているのだ。

御帳台の帳（6）

同じくサークルI内にある女三宮の御帳台は前述した通り、源氏との夜の生活や密通を表すものだが、その御帳台の「帳」（上図朱雀院の背後の「帳」）をわざわざ描き込

む必要性はさほど感じられない。位置もやや強引である。そこまでして御帳台を描いた理由は、その位置にこそ大きく起因する。御帳台の「帳」はサークル図で示すならばサークルⅡに、つまりは持ち主である女三宮、または当事者である源氏ではなく、御帳台に関しては部外者である朱雀院のいる場所に描かれているのである。なおかつ、院の頭上に圧し掛かるかのように垂れ込めて描かれている。御帳台の「帳」の乱れを院の真上に描いたことで、女三宮に対する朱雀院の心の葛藤そのものであるかのように見えるのである。朱雀院は既に出家した身ながらも、終始女三宮を心配し、彼女の存在に心を縛られている。後で触れることだが、サークルⅡにあり、朱雀院のすぐ横に置かれた几帳Dの帳はまったく乱れてはいない。しかし朱雀院の後ろにあり、院からは見えない位置にある御帳台の「帳」は激しく乱れているのである。御帳台の持ち主はもちろん女三宮であり、「帳」の乱れは彼女の苦悩を、または密通によって乱れてしまった彼女の性そのものを表現している。しかし、その「帳」を朱雀院の間近に描き、一見すると乱れもなく、穏やかに描かれた几帳Dと重ねて見ることで、朱雀院の心の表と裏をも表しているのだ。

二　サークルⅡ

続くサークルⅡにあるのは、女三宮の方に体を乗り出す朱雀院と、女三宮を覆うかのような位置に置かれている几帳Dである。先にも書いたが、几帳Dは朱雀院の親心も象徴するものである。御帳台にやや背いて、几帳Dは朱雀院と曲線で結べる延長線上に置いてある。即ち几帳Dは源氏とさせた結婚に後悔しながらも、傷ついたであろう娘を温かく包む父の思いを代弁するために描かれているのである。そのため、几帳Dの「帳」はまったく乱れてはおらず、女三宮を支えるかのように、そっと置かれているのだ。そして御帳台の「帳」の乱れをも覆い隠す位置にあるのもまた、朱雀院の父として

几帳D（7）

娘を思う気持ちの表れに他ならない。また、几帳Dは他の几帳とは違う様態で描かれており、これは女三宮自身の私的な几帳であることが分かる。

三　御帳台をめぐる「物語」

そもそもこの柏木（一）の舞台となっているのは彼女の寝室という、非常にプライベートな場所である。そのような几帳が置かれているのは至極当然だろう。几帳Dを本来の持ち主である女三宮に付随する物として見るのならば、女三宮の心中を表現する物となるだろう。朱雀院の延長線上に置かれた几帳D、としてではなく、女三宮の右側に置かれた几帳Dとして見ると、まるで御帳台の「帳」を押しのけようとするように置かれているのである。女三宮は幼さが抜けない女君として書かれており、柏木の情熱に流されるまま密通を犯し、妊娠に至ってしまった。同じように密通の結果、妊娠した藤壺宮は、桐壺帝に申し訳なく、恐ろしく思いながらも、母として自覚を持ち、子を守ろうとして動く。しかし女三宮はただただ、源氏を恐れるのみである。几帳Dはそのような彼女の幼く浅い心の有り様そのものに見える。女三宮は、まさに臭いものには蓋を、というように、彼女の罪を晒す御帳台に几帳Dを押し付け、顔を背けているのである。

それに加え、親子の間で、性というものは非常に微妙な問題である。それは男と女、という性別による区別ではなく、親と子という別の観点からの区別を無意識にしているので、いざという時に互いの性別に違和感を覚えるからかもしれない。特にそれが、父親と娘といった異性同士となると、殊更にデリケートな問題になってしまう。娘が性的な間違いを犯しても、皇女という身分の高貴性と性別の壁に阻まれて、男親が娘の心中にまで降りて諭すことは困難なのである。朱雀院は、なんとなく察していたであろう[8]女三宮の密通を責めることも、問いただすことも、源氏を交えて和解する道を取ることもせずに、彼女の出家の願いを受け入れ、それを見届けることで保護者としての役割を果たそうとした。サークルⅠにいる娘と、サークルⅡにいる父親、そしてⅠⅡの両人の後ろに描かれた娘の御帳台と几帳は、そのような微妙な親子間相互の心中を推し量る手がかりとなるだろう。重要と思しき人物に几帳が割り当てられているように見えるこの柏木（一）で、朱雀院と女三宮は己の心中を表す調度品を共有しながらも、互いの顔を見つめようとはしない。そこに、仲睦まじかった親子の間に確かに生じてしまった溝を覗き見ることができるのである。

そしてサークルⅠとⅡを合わせて見ると、そこには、この結婚の当事者たちの姿が浮かび上がる。その際、源氏と朱雀院の間にある

むき出しの板床が目に付くが、これは女三宮の出家という事態によって再び亀裂の入ってしまった兄弟仲を暗示しているものである。

四　几帳の乱れ

サークルⅢには、Ⅰ～Ⅱ内で認知されている不義と、女三宮の出家という一連の騒動を世間に隠すかのように置かれた几帳ＢＣがある。ここで目に付くのが、几帳Ｃの置かれている角度である。本来、几帳Ｃは、几帳Ｂがそうであるように畳の向きに沿って置かれるのが本来の配置の仕方である。朱雀院の頭上にある畳縁の向きに合わせて置かれるべき几帳Ｃだが、ここではその向きが乱されている。そして几帳ＢＣをよく見ると、几帳Ｂは画面中央上方向に延長線を引くと御帳台を囲う位置にあり、またＣも画面左下方向に延長線を引くと、源氏を含む三者を覆う位置にある。この二つを右下、女房②の方向に延長線を引くと一つの角が出来、サークルⅠとⅡを包む、秘密を密閉した空間がそこに生じる。このように几帳Ｃの向きを変え、また作為的に几帳ＢＣを配置したのは誰なのか。几帳ＢＣの配置については後で詳しく述べるが、それらのことには女房①～③群とは離れて座っている女房④が関わっているのではないだろうか。その女房④、私は彼女を小侍従の母、つまり女三宮の乳母ではないかと推測している。乳母は最も女三宮に身近な存在である。彼女はいついかなる時も女三宮の側にいるべき人物であり、主人が出家すると言っているときであるなら尚更である。女三宮の、または女三宮に影響をもたらす源氏や朱雀院の様子を窺うために、彼女は全身で会話を聞いているのである。その熱心さが几帳Ｃを押しのける力を生み、几帳の秩序ある配置を乱したのである。

最後のサークルⅣは女三宮の出家を悲しむ女房①②群と、それからわずかに離れて女房③、そして几帳Ａから成る空間である。女房①②、几帳Ａは、いわば外的ファクターであり、密通の事実を知らない世間一般の人々を表している。女三宮は出産したばかりであるから、当時の習わしとして、彼女に近しい者は白の着物を着ているが（画中では銀が酸化し灰色に変色してしまっている）、女房①②は華やかな衣装を纏っており、部外者の立場を明らかにしている。

また、几帳Ａの帳は乱れているものの、同じような間隔で広がっていることから、風になびいているのではないかと見られ、このことから画面から見て、正面方向は庭に面しているのではないかと推測できる。つまりこの几帳Ａは、女房たちが嘆いている女三宮の出家というニュースが外に知れ渡るということの暗示なのである。女房①②は、高貴な生まれで幸せを約束されている自分たちの主が、若い身で出家してしまうことを、訳も分からずに悲しんでいるのみ

几帳ＢＣの延長線図 (9)

几帳Ｃと女房④ (10)

几帳Ａ (11)

で、それ以上の行為、例えば女房④のように女三宮らの様子を窺ってその理由を追求しようとはしていない。つまり彼女らの存在は、女三宮の出家という事件は世間の人も奇異と受け止めはするものの、悲しいこと、哀れなこととして受け止めるのみであるという伏線であり、密通の秘密は世間一般の人々には漏れないという暗示なのである。

五　秘密にあずかる女房

残る女房③だが、彼女は小侍従ではないだろうか。先ほど私は女房④を乳母ではないかと推測した。彼女をそうだと考えた理由は、女三宮の近くで仕えていることを示す白を着ていること、女房たちの中で女三宮の最も側にいること、非常に強い関心を持って聞き耳をたてていること等である。また、柏木（一）の画中において、女房③と④は似通った姿で描かれているのも目を引く。同じような描かれ方をされている女房が東屋（一）にもいる。ひとつの絵の中に、女房と浮舟を同じ姿で描くことにより、当初匂宮が見た浮舟はその女房と同じような軽い存在（あるいは身分）であったということを鑑賞者に知らせる効果があるのだが[12]、柏木（一）の場合は女房同士であり、そのような女君と女房の印象を重ねるような含みは無いだろう。もし何か含まれたものがあるとするならば、彼女らの関係性

女房③（小侍従？）[13]

女房②と女房③[14]

ではないだろうか。女房③が小侍従であるならば乳母子である小侍従も当然白を着ていなければならない。しかし女房③は橙色の着物を着ており、その点から見れば、彼女もまた女房①②と同じく外的因子であるべきである。しかし、確固として女三宮に関わりが深い人物として描かれている女房④と重ねるようにして描くことで、外的グループの近くに居ながらも、女三宮に関心を向けている立場に留まっているのではないだろうか。そして、彼女のいる場所もまた興味深い。女房③は部屋を仕切る襖の向こう側、つまりは女三宮らがいる部屋とは別の部屋に座りながらも、こちら側に大きく身を乗り出している。その視線（関心）は几帳Ｂで遮られているとはいえ、女三宮や朱雀院、源氏のいる空間へと向けられている。そのように大きく関心を示しながらも、彼女は半ば身を隠すようにして潜んでいるのである。この様子は明らかに、外的ファクターである女房①②とは異なっている。そしてまた、女房③が身を隠す几帳Ｂ、これは配置からしても、女房③に付随するものだろう。几帳Ｂは裏と表どちらも描かれているが、そのどちらの面の「帳」も微妙に揺らいでいる。女房③の様子、そして彼女に付随する几帳Ｂから感じられるのは、微妙な不安感である。

このような場所で、事情を知らない女房がそのような態度を示すことはあるかもしれないが、その場合、女房①②のように複数で描かれるべきであろう。現存する「源氏物語絵巻」内で、単に覗き見をするだけの女房は決して単独では描かれない。群衆として描かれることで観客の意味を成し、そうすることで物語の展開に関わる影響を打ち消すのだ。

逆を言うならば、単独で描かれる登場人物は、その存在に物語上の意味を持つ者である。女房③の場合はまさしくその意味を持つ者として、際立たせて描かれている。そしてこの柏木（一）の場面において、そのように描かれる女房は小侍従しかいないのである。

小侍従は密通の手引きをした女房であり、几帳ＢＣによって閉じられる空間内で過去に起こったことを全て把握している人物である。しかし彼女自身が几帳ＢＣを配置したと思うのは強引であろう。むしろ、彼女は几帳を配置した、その時その場にはいなかったのではないか。朱雀院が女三宮を訪れ、源氏を交えて会話が始まり、女三宮が出家の発心を告げたところでようやく、ためらいがちに出てきたのではないだろうか。女房③の左手に描かれた襖がやや中途半端に開けられていることも、本来閉じてあったであろうその襖が、女房③、小侍従によって開けられたものだと説明がつく。

六　女房の視線

では、几帳を設置した人物は誰なのか。几帳ＢＣを配置した人物、

それは乳母ではないだろうか。几帳を、秘密を密閉するということや、人物の心情を表す道具という見方を抜きにし、単に女三宮の部屋に置かれた調度品として几帳を見てみると、Bはともかく、CやEの置かれている場所に几帳を置く必要性はさほどあるとは思えない。几帳Bは部屋の入り口に置かれている、目隠しの役割をしている几帳であり、常時そこにある物である。しかしCやEはというと、これという理由は無いのである。帝であった朱雀院や、准太上天皇である源氏、そして二品の宮として遇されている女三宮がいるのだから、彼らの身分を考慮して几帳を置くというのなら必要性もあるかもしれないが、女三宮の元にいるのは、源氏の失笑を買うほど気配りがなく、落ち着きがない女房たちである。やや仰々しくさえ感じる几帳の配置を、そのような女房たちがしたとは考えにくい。となると几帳の配置に心配りのできる、相応の年かさの人物が行ったのではないか。この場合、その人物は乳母に当てはまるのである。

乳母が女三宮の犯した密通を知っていたとは考えにくいが、薄々と感づいていたのではないだろうかと私は思う。朱雀院ですら、感づいてはいたのだ。常時側にいて、最も女三宮の性質を理解している乳母が、出家に至るまでの決断をした女三宮の心情を察することはできたのではないだろうか。几帳BにCを加えて出来た密閉空間は、そこで起こったことを外に漏らさないよう、女三宮のために乳母が造った防護壁なのである。そこには、幼くして母親を亡くした女三宮を母代わりとして育ててきた乳母の母性による保護も感じられる。

サークルⅢ、Ⅳには女房しか描かれていないものの、実にこの絵の半分のスペースをとって描かれている。そこには、この絵の作者がどうしても描きたかったものが籠められているとも考えられる。それは、一見重要視する必要のない女房たちの、行き交う視線であり、特に乳母、小侍従の持つ視線の力である。それらを描くことで、左に固まって描かれた朱雀院、源氏、女三宮にのみ鑑賞者の目を向けさせずに、右端にいる小侍従、中央にいる乳母にも目を向けさせ、この絵全体に鑑賞者の目が行き渡るようにしたのだ。

おわりに

以上、あえて絵巻の見方（右→左）とは逆の順番で書いたが、今までⅠ～Ⅳと見てきたサークルを、絵巻の見方に沿って、Ⅳ～Ⅰと見ていくとどうなるか。女房群の悲しみの場面から始まり、こっそりと様子を窺う小侍従が登場し、無機質で直線的な几帳が現れ、それらを配置し、なおかつそこに自らも潜む乳母がいる。そしてそれぞれに嘆く朱雀院、源氏、女三宮と続いて、最後の御帳台が姿を現すのである。柏木（一）は、秘密を十重二十重に覆い隠して、徐々

に徐々にその全貌を明らかにしていく構成となっているのである。

その中で女三宮があえて流れに反する向きをとることで、サークルⅣから始まった悲しみや不安感はここで吹き溜まりのように溜まり、女三宮に迫り、彼女の悲愴さに拍車を掛けるのである。

源氏物語において、密通は繰り返されるテーマである。その重要なテーマをここでは三角形と層になったサークルを利用することで構図化し、そこに秘められた心情を浮き彫りにした。

佐野みどりの示した三角形構成図が登場人物の心理に沿った文脈への誘いであるならば、ここで述べたサークル構成図は、登場人物がそれぞれに認知している物語を、調度品を利用することで視覚化した心理描写の区分図なのである。

注（1）佐野みどり『風流　造形　物語』（スカイドア　一九九七）。

（2）右同書からの引用図。

（3）資料用に鈴木が制作した図。以下の図もすべて鈴木が模写した図を使用した。

（4）三谷邦明・三田村雅子『源氏物語絵巻の謎を読み解く』角川書店一九九八年。

（5）～（7）（3）に同じ。

（8）柏木の巻で朱雀院は、「行く末遠き人は、かへりてことの乱れあり、世の人に誹らるるやうありぬべき」と述べ、女三宮の精神的な幼さに伴う危険を危惧し、女三宮の出家に賛成する。

（9）～（11）（3）に同じ。

（12）稲本万里子「源氏物語絵巻」『週刊朝日百科　世界の文学　源氏物語』二〇〇一年の指摘による。

（13）～（14）（3）に同じ。

（二〇〇五年　卒業）